

2. 2023 年度 PBL 活動概要

(1) 体験格差解消に向けたファシリテーションについて

「豊かさ」の創造チーム

横溝俊，部矢有紀，武田晏奈，羅古月，古閑日奈子，角南葵乃助

本研究の目的は、ワークショップの実施を通して小学生に対して体験活動を伴うワークショップを継続的に実施することで、小学生の体験格差の解消に寄与することである。近年、体験活動の格差が著しいものとなっている。それは経済的・物的要素、環境的要素、健康的要素、心的要素といった様々な要因が重なって起きている。しかし、このような格差によって、将来的に子どもたちの自尊感情や社会性といった内面のみならず、学力などにも影響を及ぼすことが先行研究によって明らかとなっている。以上のような格差の解消に向けて、「豊かさ」を主題としたワークショップを実施すると共に、次世代を担う高校生が探究活動として実施するワークショップのファシリテーションの高度化を目指した。ワークショップの結果、「豊かさ」に対して一部有意な結果が見られた。しかし、課題点として、成果の検証が継続できなかった点や高等学校で実践する際に協力いただく教師側の負担も大きいといった点も浮き彫りとなった。今後は、そのような課題を元に、高等学校における総合的な探究の時間における継続的なワークショップの実施を目的として、効果的なファシリテーションの方法の検証及び高等学校との協議を深めていきたい。

Keyword：体験格差，豊かさ，高校生，総合的な探究の時間，ウェルビーイング

1. 問題の所在

近年、体験活動の教育的意義に対して注目が集まっている。文部科学省「令和2年度青少年の体験活動に関する調査研究結果報告」(2021)¹⁾によると、小学生の頃に体験活動をよくしていた子どもは、高校生の時に自尊感情や外向性といった非認知能力が高くなる傾向がみられた。また、増田(2022)²⁾の大学生を対象とした調査においても、年少期に経験した体験活動と社会性の発達との関連を分析した結果、有意な関連性がみられた。

以上のような教育的な意義を内包する体験活動は広く行われるべきである。しかし、その体験には格差が存在するのが実態である。公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン(2023)³⁾によると、世帯年収300万円未満の家庭の子どもの約3人に1人が、1年を通じて学校外の体験活動を何もしておらず、その割合は世帯年収600万円以上の世帯と比較して2.6倍高い。また、保護者が子どもへの体験活動を諦めた理由として、経済的理由の他に、時間的・精神的・体力的な理由も挙げた。体験格差解消のためには子どものみならず、保護者へのアプローチも必要不可欠であることがわかる。また、体験活動への支援は継続的な取り組みが望ましい。しかし、大学

院生が実施するPBL等の取り組みでは継続性が保ちにくい。体験格差の解消のためには、一度や二度のワークショップでは限界がある。この継続性についての問題点を解消するため、来年度以降の高等学校における総合的な探究の時間(総探)と連携することを考えた。その試行として、総探に注力している岡山県立岡山芳泉高等学校の10名の高校生に参加していただき、大学院生が高校生をファシリテートする形で協働的な取り組みを実施した。

ファシリテーションにおいては、以下の三つの点を重視する。①高校生が「自分ごと」として体験格差解消のワークショップ実施を行う。②高等学校及び教師への負担を軽減するため、ファシリテーション教材を検証する。③ワークショップは参加する子どもたちにとって、有意義なものにする。以上を重視し、ワークショップ実施の成果を分析し、体験格差解消を促進させる方法について探っていく。

1-1 体験活動とは

本報告書における「体験活動」とは、文部科学省(2016)「平成28年度文部科学白書」内の特集「子供たちの未来を育む豊かな体験活動の充実」から引用する。定義は以下の通りである。

「主として『体験を通じて何らかの学習が行われることを目的として、体験するものに対して意図的・計画的に提供される体験』のことを指します。」

3)

また、以上のような体験活動を行うことの意義として、「社会を生き抜く力」として必要となる基礎的な能力を養う効果があると考えられていると書かれている。その基礎的な能力として、「仲間とのコミュニケーション能力や自立心、主体性、協調性、チャレンジ精神、責任感、想像力、異なる他者と協働する能力等」と幅広い能力が定義づけられている⁴⁾。

このことから、育成すべき幅広い能力の中から、目的意識を明らかにした上で活動が行われることが重要となる。そこで、本研究のキーワードである「豊かさ」を主題とした。ウェビング・マップ等の多くの仕掛けを利用してファシリテーションすることで、主体的な探究を促している。詳細は紙面の関係上割愛するが、4月にWeb上で公開予定の教材で詳細を報告する予定である。

2. ワークショップについて

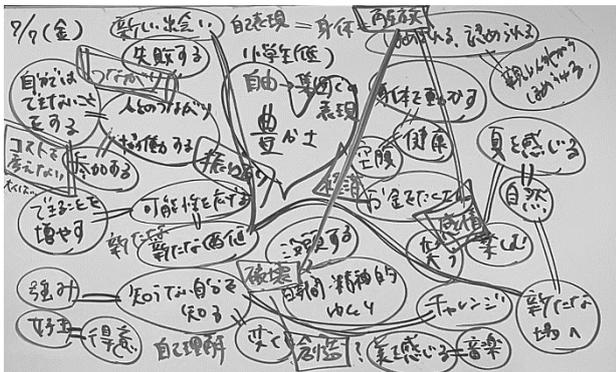


図1 「豊かさ」のブレインストーミング

ワークショップ実施に際して、ブレインストーミング法を用いて、「豊かさ」について考察し、各ワークショップが目的とする「豊かさ」の要素を明らかにした上で、行っている。

全4回のワークショップを開催した。それぞれのワークショップの概要は以下の通りである。第1回は「からあやぶり」として体を動かすアート活動型のワークショップを実施した。第2回は「おちばアート」として自然物を用いたアート活動型ワークショップを実施した。第3回は、「お仕事インタビュー」として、中学生を対象に企業の方と「働くこと」についての対話型ワークショップを実施した。第4回は高校生主体で「おとな食堂」として収穫体験及

び料理活動型ワークショップを実施した。本報告書では、分量の関係上、第1回ワークショップと第4回ワークショップに関して報告する。

2-1 第1回ワークショップの概要

本ワークショップでは、「からあやぶり」と題し、無料でアート活動型ワークショップを実施した。「解放」を主な「豊かさ」の要素として、床一面に布(株式会社菅公学生服様から提供)を敷き、全身を使い、絵を描くことを子どもに促した。

また、本ワークショップは、第4回ワークショップを主体として行う高校生がテーマの深掘りをするための仕掛けとした。ワークシートを用い、観察者として参加することで、高校生の総探に対する視点を養うことを目的とした。

・ワークショップ名

「からあやぶりーあーとをのこすー」

・開催場所

北長瀬未来ふれあい総合公園内

みはらしプラザ 1階 D-Space

・開催日時

2023年8月13日(日) 13:00-15:00

・参加者

3-11歳の子ども 15名

大学院生 6名 高校生 10名

・使用道具

ゆび絵の具(白・赤・青・黄)、風船、

箒、スポンジ、水鉄砲、ローラーなど

活動内容について

(1) 本ワークショップの説明

(2) アイスブレイク

(3) 「からあやぶり」開始



図2 全身を使って絵を描く子どもたち

ゆび絵の具を用いて、指や腕、体全体を用いて描くことを、大学院生が手本を見せることで促した。また、道具を置き、自由に使用できることとした。子どもたちは、全身を使ってアート活動に取り組んでおり、録画映像においても笑顔や「楽しい」とい

った文言のつぶやきが所々で見られた。

2-2 第4回ワークショップの概要

高校生が主体で料理型ワークショップを企画実施した。「子ども食堂」をヒントに、子どもが大人に料理を振る舞う「大人食堂」を企画した。クリティカルパスやギャップ分析図を用いて、ファシリテーションを行った。詳細については紙面の関係上、割愛するが、4月にWeb上で公開予定の教材で詳細を報告する予定である。

- ・ワークショップ名 大人食堂
- ・開催場所 岡山市立南公民館、岡山県立岡山芳泉高等学校、めぐみ農園様
- ・開催日時 12月10日(日)
- ・参加者 小学生9名

活動内容について

- (1) 本ワークショップの説明
- (2) めぐみ農園において収穫体験
- (3) オリジナルピザの考案・話し合い
グループに分かれ、オリジナルピザのコンセプトやその理由について考察・話し合いを重ねた。
- (4) ピザ作成
- (5) 小学生によるピザのプレゼンテーション
- (6) 保護者や地域の方と共に食事
- (7) まとめ



図3 オリジナルピザを作成中の子どもたち

3. 研究の方法

第1回ワークショップについて、保護者を対象とし、事前・事後アンケート調査を行った。本ワークショップの分析を行う理由は、少なくとも本ワークショップが子どもたちの「豊かさ」に関して効果があったか、検証する必要があるためである。また、保護者へのアンケートを行った理由は、参加した子どもの年齢が3歳ということで、子ども本人がアン

ケートに回答することは難しいと考え、子どもたちの変化を身近で見ることが出来る保護者へのアンケートとした。事前・事後アンケートの内容を表1から3に示す。アンケートの項目は、前野隆司氏が挙げる幸せの四つの因子を元に作成した(図4)⁶⁾。前野氏によると、「豊かさ」は経済的・物的要素、環境的要素、健康的要素、心的要素によって構成されており、さらに心的要素は、4つの幸せの因子で構成されている(図4)。幸せの因子が充実すると心が豊かな状態になる。そこで、この因子を参考に質問項目を設定した(因子a:②③, b:⑦⑧, c:⑤, d:④⑥)。また、事前・事後アンケートで同じ数字の項目が対応している(①と①, ②と②等)。

表1 事前アンケート質問項目

①あなたのお子様は、感情豊かな方である。	②あなたのお子様は、やりたいことをすぐに行動に移す方である。
③あなたのお子様は、よく自分から「お手伝いしたい」など意思表示する方である。	④あなたのお子様は、遊ぶ時に周りの目を気にせずに没頭する(夢中になる)方である。
⑤あなたのお子様は、失敗を恐れずにチャレンジする方である。	⑥あなたのお子様は、好きなことにとことんこだわりを持つ方である。
⑦あなたのお子様は、初めて会った子とすぐに遊べる方である(打ち解ける方である)。	⑧あなたのお子様は、友達が多い方である。

(大変あてはまる/だいたいあてはまる/どちらともいえない/だいたいあてはまらない/全くあてはまらないの5つの選択式とした)

表2 事後アンケート質問項目(選択)

①あなたのお子様は、ワークショップを経て、感情豊かなような変化が見られた。	②あなたのお子様は、ワークショップを経て、やりたいことをすぐに行動に移すような変化が見られた。
③あなたのお子様は、ワークショップを経て、自分から「お手伝いしたい」など意思表示するような変化が見られた。	④あなたのお子様は、ワークショップを経て、遊ぶ時に周りの目を気にせずに没頭する(夢中になる)ような変化が見られた。
⑤あなたのお子様は、ワークショップを経て、失敗を恐れずにチャレンジするよう変化が見られた。	

(大変あてはまる/少しあてはまる/どちらともいえない/あまりあてはまらない/全くあてはまらないの5つの選択式とした)

表3 事後アンケート質問項目(記述)

①今回のワークショップは、「豊かな」体験活動であったと感じましたか?100点満点で点数をつけていただき、「豊かな」体験活動であったと感じる点があれば、どのような点が「豊か」であったか、ご記入ください。	②今回のワークショップについて、ご家庭でお子様から、話題にすることがありましたか?もし、話題になったことがあれば、その内容を簡単に記入ください。
③今回のワークショップで、お子様の新たな一面が見られましたか?もし、見られた場合は、どのような点が簡単に記入ください。	④今回のワークショップを経て、お子様に何らかの変化が見られましたか?もし、変化があれば、ご記入ください。

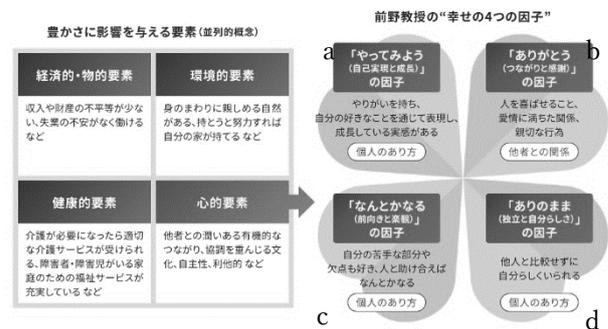


図4 幸せの4つの因子⁶⁾ 一部改変

4. 考察

実施した事前アンケートは、参加した15名の子どもと同数の15名からの回答があり、事後アンケートは、8名のみの回答だった。

事前アンケートでは、多くの項目で、「大変あてはまる」や「だいたいあてはまる」を選択した保護者が多かった。そのため、事後アンケートでポジティブな変化が出にくいことも予想したが、事後アンケートでは、以下のような変化が見られた。

対象者で唯一、①で「だいたいあてはまらない」と解答した対象者Aは、①では「少しあてはまる」と解答しており、元々感情豊かではない子どもにポジティブな効果があったことが分かる。①で「大変あてはまる」や「少しあてはまる」とポジティブな回答をした対象者らも①では全て「大変あてはまる」と解答しており、保護者から見て感情が豊かに見える子も、保護者の期待以上にさらに感情豊かに変容したことが分かる。しかし、幸せの4つの因子に関係するその他の項目では、事後でポジティブな変化をもたらすような明確な効果は確認できなかった。

記述式の質問項目の、「今回のワークショップは『豊かな』体験活動であったと感じましたか？100点満点で点数をつけていただき、『豊かな』体験活動であったと感じる点があれば、どのような点が『豊か』であったか、ご記入ください。(以下略)」では、概ね70-100点が多かった。100点と記述した保護者からは「100点と子供なら思うはずです。誰の目も気にせず全身を使って思いのままに自己表現をしたい。子供たちの思いを実現できたのでこれは『豊か』な体験なのだと思います。」との感想が見られた。保護者目線でも「豊かさ」を感じる活動であったと思われる。

以上のような調査の結果、少なくとも本ワークショップは、子どもたちにとってわずかながら「豊かな」体験を提供出来たと思われる。このようなワークショップが継続的に実施されることで、子どもたちの体験格差は解消されるものと考えられる。

5. 今後の展望と課題

今後の展望として、今回参加して頂いた岡山県立岡山芳泉高等学校の生徒の実践を先行事例として、総合的な探究の時間を用いて、継続的にワークショップが実施されることが望ましい。これについては、メンバーの一部が来年度に向け、高等学校側と検討中である。紙面の関係上、高校生の探究の様子を詳しく報告できないが、プロジェクトに参画した高校生のポジティブな変容が著しく、ファシリテーションの仕掛け等が有効だったことが強く示唆されている。検証した仕掛けを活用しながら来年度以後も総探として活動を継続できることを期待している。

課題としては、以下の三点を挙げる。一点目とし

て、岡山芳泉高等学校以外での実施が可能か検証できていない点がある。岡山芳泉高等学校は以前から意欲的に総探に取り組んでおり、学校の意識が高い。そうでない高等学校でも、今回のような効果的な総探の実施が可能か検証する必要がある。今回検証したファシリテーションの仕掛け等を紹介する教材は、4月に動画教材としてWeb上で公開を予定している。この動画教材を他の高等学校が活用して、効果的な総探が実現できるかを検証したい。二点目として、真に体験格差が大きい子どものニーズが検証できていない点を挙げる。プライバシーにも配慮が必要で、今後は実態調査のため、行政との連携が必要だと考えられる。三点目として、ワークショップの対象者が毎回変更されたことを挙げる。対象者が変更されたことで、継続的なワークショップを実施することの効果の検証が十分にできない状態となった。今後も継続し高校生と連携することで地域に根差した活動になるよう検討していく必要がある。

6. 謝辞

本研究を進めるにあたりご協力して頂きました、一般社団法人「学びのイノベーション・プラットフォーム Platform for Learning Innovation - Japan (PLIJ)」様、株式会社菅公学生服様、キノシタショウテン様、岡山県立岡山芳泉高等学校校長丸山浩様、藤原義典先生を始めとする岡山芳泉高等学校の先生方及び参加して頂いた岡山芳泉高等学校の生徒の皆様、ご指導賜りました稲田佳彦先生に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文部科学省、「令和2年度政長年の体験活動に関する調査研究結果報告」, 2021, p. 22
- 2) 増田啓子「子どもの自然・生活体験の蓄積と社会的スキルの発達-野外活動・自然・家事体験からの分析-」, 2022
- 3) 公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン「子どもの『体験格差』実態調査最終報告書～全国の小学生保護者 2,097人へのアンケート調査～」, 2023
- 4) 文部科学省、「平成28年度 文部科学白書」, 2016, p. 30
- 5) 同上, p. 30
- 6) 前野隆司「幸せのダイナミクスとデザイン」, 2016